

否定と〈否定〉をめぐるって

——石川求著『カントと無限判断の世界』（2018年、法政大学出版局）に寄せて

三重野 清 顕

はじめに

本書は、〈否定〉をめぐる思考の徹底性、また問題を追跡する思想史的視野の広範さにおいて、まさしく比類なき研究である。伝統的に真理はしばしば「光」というメタファーと結びつけられてきたが¹、「啓蒙の哲学者」（本書233頁）としてのカントには、たしかにこの伝統に属する一面がある。これまでドイツ古典哲学は、主として「理性の光」を介して哲学史のうちに位置づけられてきたと言えよう。しかしその一方で、ドイツ古典哲学には単純な理性中心主義に収まらない側面もあることも明らかとなってきた。理性の専制に対して疑問が呈され、むしろ理性へと解消不可能なものへと目が向けられるようになった現代においては、むしろ彼らの思考が決して光へと同一化されえない「闇」をどのように抱え込んでおり、またそれと向かい合っているかに大きな関心が寄せられているように思われる。本書で提示される、光へと一元的に回収されない「闇」への視点、しかもそれを光と二元論的に対置するのではなく、それを「限界」づける「不定」の深淵として捉える見方は、評者にとって思想史の全体を把握するための新たな視点を切り開いてくれるものであった。以下主に本書第三章までの概要を辿るとともに、評者自身の関心に基づいて問題提起を行うこととしたい。

1 ブルーメンベルク『光の形而上学——真理のメタファーとしての光』生松敬三、熊田陽一郎訳、朝日出版社、1977年。

本書第三章までの概要

本書は、通常の否定の「手前に」、いわば否定の根源的形態として〈否定〉を見いだす。「プラトンとヘーゲルがともに注視しているのは、「ない」という否定には、或る事態の肯定（ある）に対立する否定、プラトンの言葉では「反対」としての否定のほかに——むしろそうした否定の手前に——、「あるもの」とはただ異なっているものとしての独特の〈否定〉、いってみれば否定のための否定も存在するということである」(vi 頁)。一方には「暗黙の共通基盤」を前提とする否定があり、それが通常の否定判断を基礎づけている。それに対して、無限判断が依拠する〈否定〉とは、本来関係なきものの関係である。カント哲学における最も重要な区別の一つである「現象」と「物自体」の区別は、このような〈否定〉の関係として捉えられなければならない。「こうした特異で微妙な〈関係〉が、カントにおける（ほんらい無関係であるはずの）現象と物自体、すなわち現象と脱現象、現象と現象ならぬもの、には成り立っている」(x 頁)。

本書の要をなすのは、カントの『純粹理性批判』における「無限判断」をめぐる一節の精密な読解である（第2章）。分量から見ればごく限られたテキストの精読であるが、その読解の成果を足掛かりとしてカントの批判哲学の構想の全体像とその狙いが明瞭に浮かび上がってくることになる。読解にあたっては読みを妨げる無意識のバイアスを排する必要があるが、それは「もう一つの西洋哲学史」としての無限判断の哲学史を辿り直すうちに読者の眼にも明らかにされてゆく。

著者によれば、『純粹理性批判』においてカントが主張したのは、「①無限判断は「形式的には肯定、内容的には否定である」。ゆえに肯定判断から区別されるべきである」(4 頁)ということにほかならない。それにもかかわらず、多くの論者がカントの無限判断のうちに何とかして肯定的な機能を読み取ろうとしてきた。その結果、カントのテキストそのものが理解不能として「改訂」が施されるという本末転倒にすら立ち至った。さまざまな要因によって、カントの無限判断をめぐる一節の読解は妨げられてきたのである。読解を妨げる誘因として、(1) 判断表の三分法の誘惑、(2) 「イエッシェ論理学」をはじめとするさまざまな二次資料の優先、そして「事

態としてみれば最も強力となる誘因」(11頁)として(3)「コーエンの呪縛」を著者は指摘する。これらの誘因がテキスト読解において実際にどのような働いてきたかは、第2章で詳しく分析されている。

「無限判断」の理解をめぐる錯綜した状況を、無限判断の哲学的「焦点」を〈否定〉に見定めることで著者は解きほぐしてゆく。ヘーゲルの無限判断についての理解は基本的に、著者の言う〈否定〉という線に沿ったものだといえる。それに真っ向から対立するのが、「連続性」にその焦点があるとするコーエンの“無限判断”論である。「無限判断の焦点はコーエンのいう「連続」なのか、それともヘーゲルのいう「乖離」なのか。さらに、無限判断によって主語は規定されうる(コーエン)のか、いや、規定されない(ヘーゲル)のか。この真逆の観点によって、両者の見解は正面から対立している」(25頁)。ここに〈否定〉をめぐるバトン・リレーとしての「無限判断」の思想史が描き出されるが、最終的にバトンを受け取り損なったがゆえに自前の“無限判断”をでっち上げた廉で批判されるのがコーエンなのである。さらには、このようなコーエン的な連続性の予断の影響が、カントのテキストの素直な読解を妨げてきたことが指摘されるのである。

前述のように、『純粋理性批判』においてカントが主張したのは「①無限判断は「形式的には肯定、内容的には否定である」。ゆえに肯定判断から区別されるべきである」ということが著者の主張であった。このような無限判断の論理的「原点」と哲学的「焦点」を、筆者は以下のように見定めている。「あの①の主張の骨格は、無限判断は「形式的には肯定」(●)だが、「内容的には否定」(○)だと述べる。これの前半部(●)が無限判断の論理学的「原点」であり、後半部(○)がその哲学的「焦点」である」(27頁)。無限判断の論理的「原点」は、アリストテレスが「コプラ否定」(＝否定判断)と「述語否定」(＝無限判断)を区別し、述語否定を一種の肯定言明とみなしたことに求められる。ただし、「全面否定か限定否定か」(あるいは〈否定〉か否定か)という哲学的焦点を問題とするかぎりには、「コプラ否定」と「述語否定」の論理的形式の区別に大きな意味はないことに著者は注意を促している(35頁)。そして、むしろこの論理的形式の側に歴史上多くの論者たちが引きずられ、幻惑されてきた事実もまた本書は明

らかにしている。

他方で無限判断の哲学的「焦点」は、その内容の不定性、無限性にある。「カントは無限判断がかかえる無数の述語が、しかし主語のいかなる述定にもならないこと、その意味で無限判断が疑似判断であることを見抜いている。」(33頁)。このような無限判断の哲学的「焦点」の前史を辿れば、アリストテレスにおける「否定 (ἀπόφασις)」と「欠性 (στέρησις)」、つまり述語の全面否定と限定否定の区別へと遡ることができる。また同じ区別は、「差別ヘテロテラスと異他のちがひ」(34頁)としても語られる。アプロディシアスのアレクサンドロスの『アリストテレス形而上学註解』に登場する「壁は視ない」という全面否定の例文は、「無限判断の貴重なバトン」として後世に受け継がれることになった。コーエンが自前の“無限判断”の典拠としたマイモニデスについても検討が加えられ、結果として「欠性の否定」が「全面否定すなわち〈否定〉」(45頁)であると結論づけられている。さらにはスピノザ、マイモンとフィヒテ、ヘーゲル、そして最後にカントが同じ哲学的焦点を共有していたことが確認される。なるほどカントの例文「魂は可死的ではないものである」においては、「徳は四角ではない」(マイモン)、「悟性は机ではない」(ヘーゲル)といった例に比べると、主語と述語の非連続性が見えにくい(68頁)。しかし、次章の「謎の段落」の詳細な検討を通じて示されるように、カントの場合でも「無限判断は主語がなんでないかを示唆するのみである」(73頁)。このようにして無限判断をめぐる議論において、〈否定〉という哲学的焦点が途切れることなく継承されていることが明らかにされる。

本書第3章「ヘーゲルかカントか」において、著者は最終的にフィヒテ、ヘーゲルとカントの相違を、「無限判断」においてカントと同様に〈否定〉を見据えていたはずのフィヒテ、ヘーゲルが最終的には包括的な同一性へと転回する点に見ている。ヘーゲルは「悪無限判断」から「真無限判断」へと向かい、「(肯定であれ否定であれ) 述語が積極的に主語を規定することを語る」(120頁)ことになる。また、無限判断としての「我あり」を「根源的な最高判断」とするフィヒテは、そこに自我と彼我的対立を「自我の活動性すなわち事行」を通じて克服し、「両者を連続させるような真無限判断」を見ることになる(121頁)。このような積極性への根本的転換を、

ヘーゲルもフィヒテも説得的に示すことができていないというのが、著者の見立てである。「問題は悪無限判断と真無限判断の連関、もっといえば、前者から後者への道筋である。主語と述語の絶対的分離が、一体どうして主語による述語の定立ないし包括へと進展しうるのか。残念ながら、これについての明確な説明がフィヒテにもヘーゲルにも不足しているように思われる」(122頁)。

それに対して、カントは無無限判断に「定立」や「規定」というような積極的な機能を与えることがない。「カントに話をもどすと、彼はヘーゲルのいうその「移行」を容認しないだろう。無限判断にいかなる定立も規定も許さないからである。いや、およそ経験判断の主語と述語にしても原理的に非連続——すなわち綜合——の相でしか理解しようとしなからである」(122頁)。こうしてフィヒテやヘーゲルの思考行程に対して、カントの場合には無限判断が「連続性」や「同一性」へと転換することがない。「ヘーゲルは悪無限を斥けて連続性と同一性を志向する。しかし、これにたいしてカントは、あえてこの〈区別〉の立場を採用するのである」(120頁)。カントにおける無限判断の性格は、以下のように端的に呈示されている。「主語が「なんでないか」を果てしなくそして空しく語るだけのえせ判断。これが無限判断の内容的核心である。無限判断にかんして、暗黙のうちにカントが歴史から受けとり、そして後進に渡した思想とは、そのように無限判断が内容にかんする規定ないし肯定とははっきり無縁だというものである」(112頁)。

しかしカントの独自性は、切り離された主語と述語が「徳」と「四角」のように相互に無関係に漂っているのではなく、〈否定〉がある述語を不定の(疑似)領域として粹取り、限界づける点にある。そのことはカントが、ヘーゲルのように「無限判断を主語Sと述語Pの区別で理解」するのではなく、「述語Pと非Pの区別で理解する」(104頁)ことに基礎づけられている。このような否定の無際限の集積、不定の〈否定〉として「現象」へと関係することによって、「物自体」は、「現象」を限界づける「限界概念」としての独自の意義を持つことになる。しばしばカントの「物自体」は、(たとえばわれわれの感官を触発する)「現象」の「原因」として積極的に解され、そこからカント哲学の矛盾が語られることとなった。それに対し

て著者によれば、カントの「物自体」はそのように理解されるべきではない。「カントの物自体は、ライプニッツが考える実在やヘーゲルのいう本質ではない。たしかに物自体がなければ現象はありえないし、物自体が現象の根拠（Grund）や原因（Ursache）とすら語られることも間々ある。しかし、ここでいわれる根拠とは、むしろ現象という概念が名目的に要請する論理的思考物（ens rationis）であって、それ以上の積極の意味があたえられているわけではない」（128頁）。ただし現象と物自体の場合、〈区別〉の無関係はそのままに、限界として、もはや関係ともいえないような「微かな関係」（123頁）が確保されている。「現象と物自体は、互いの限界だけは共有する二者——すなわち無限判断のSとPではなく、このPと非P——だからである。物自体は現象にとってまったく否定でしかなくとも限界概念としては現象に関係しうる。全面否定すなわち「否定でしかない否定」だけがもちうる独自の役割があるのだ」（134頁）。その役割とは、「現象」を「物自体」と錯覚する「誤謬の防止」にはかならない。

「現象」と「物自体」の区別をこのような〈否定〉の関係に基礎づけつつ、カントは感性と悟性の連続性を前提する哲学（ライプニッツ主義）に批判を加えている。「感性の越権とは、感性と悟性を不当に連続させ、感性に悟性の権限をあたえてしまうことである。感性的表象が、陰伏的ではあれ悟性的表象の萌芽のようなものをすでにふくんでいると考えることである」（143頁）。ここでのカントの意図は、互いに異なる認識能力を厳格に区別し、その越権を防止することにある。認識の成立はあくまで異種なもの「の総合」、「たがいに溶解しないものの混交であり、おのずと調和しないものの合成なのである」（148頁）。またカントの哲学は、認識の連続的な拡張への欲求に対して警鐘を鳴らすものであった。「感性は悟性に、現象は物自体に、理論理性は実践理性に、それぞれ連続していることを、少なくとも両者が架橋できることを人は欲するだろう。しかしカントは、これらの対、いや本当は対にもならないし、並べて“二つ”と数えることもできないこれらが、異次元であり、別世界であることをまず力説する」（156頁）。このような「現象」と「物自体」の関係を「他者」との関係として捉えるならば、無限判断は一元論的な他者の解消を阻止するものとなるだろう。「類を共有しない非連続のものを他者というなら、現象にとっ

て物自体はまさしく他者である」(156頁)。このようにして、本書の無限判断をめぐる思考は、他者や世界をめぐる第4章以降の議論へと開かれてゆくことになる。

さて、本書が描き出すように、フィヒテやヘーゲルの思考がある地点までは無限判断の哲学的焦点に忠実でありながら、最終的に「自己規定」という形での同一性へと反転していることは事実であり、そのかぎりでは彼らは〈否定〉の行く末を最後まで見据えることができなかったという評価も可能であろう。著者が率直に指摘しているその移行の論理の理解しがたさについても認めなければならない。その一方で、カントに続いた人々が、彼ら固有の哲学的関心からしてカントの議論を不十分であると考えていたことも間違いないであろう。続けて、フィヒテやシェリングの否定をめぐる議論に触れながら問題提起を行いたい。

二つの否定（否定と〈否定〉）の関係について

まずは、フィヒテおよびその影響下にあった初期シェリングの議論について確認したい。本書でも紹介されているとおり(54頁)、フィヒテは『全知識学の基礎』において、「綜合定立判断」、「反対定立判断」、「定立判断」という三種類の判断形式を提示し、「定立判断」についてはカントの「無限判断」の継承であることが明言されている(FW1-116ff)。「綜合定立判断」は「肯定判断」、「反対定立判断」は「否定判断」にそれぞれ相当するものであるが、それらと「定立判断」は以下の点において対立する。通常の判断においては主語と述語の「結合根拠」と「区別根拠」が必要とされ、主語と述語はある点において等しく、ある点において異なっている。それに対して、「定立判断」においては「或るものが他のものにも等しく定立されるのでもなく、対立させられるのでもない」(FW1-116)。ここではいかなる結合根拠も区別根拠も前提されえず、主語と述語は全く比較を絶している。またシェリングは『自我について』(1795年)において、「定立命題」を「定立的肯定命題」と「定立的否定命題」に区別し、定立的否定判断を「無限判断」と言い換える(SW1-220)。その例としてシェリングは「線は甘い」という、あきらかに主語と述語が乖離した例を挙げている(この例

はマイモンも用いている)。本書が指摘するとおり、彼らが無限判断をめぐると同一の文脈を共有していたことは間違いないであろう。

その一方で、フィヒテやシェリングと本書の描き出すカントの間の隔たりも決して小さくはない。定立判断「我あり」においては、「我について・はまったくなにも言明されず、述語の場合は、我の可能的規定のために無限に空っぽのままにされる」(本書54頁, FW1-116)。たしかに絶対的自我は、それ自身あらゆる規定からかけ離れている。しかしその一方で、フィヒテにおける「無限判断」という問題は、あらゆる具体的な規定にさきだつ自我そのものの定立という肯定的機能をあらかじめ組み込んだ形で考えられる。つまりフィヒテは定立判断「我あり」のうちに、「Aでもあり、Bでもあり・・・」という「真無限判断」への途をあらかじめ開いていたものと思われる。シェリングの『超越論的観念論の体系』(1800年)もまた、「我あり」という「無限な命題」が、「いかなる現実的述語も持たないが、しかしまさにそれゆえに可能的述語の無限性の定立」(SW3-367)であると述べている。このような発想は、無限判断の「非」が「それ自体として可能性のストックを提供するものではない」(139頁)カントとはきわめて対照的であると言えるであろう。以上のように、フィヒテやシェリングの無限判断論は、その根本からしてカント的な〈否定〉の思考からの逸脱をはらんでいる。

さて、本書における〈否定〉に相当する関係は、ここでは「自我」と「非我」の間に見られる関係であると考えられる。自我とそれに端的に反定立された非我は、本来同一の次元においては決して両立しえない関係にある。しかし、この決して自我のうちに取り込まれえない非我が、自我のうちに定立され自我を限定しなければならない。『自我について』でのシェリングによれば、「自我は端的に定立されている。他方非我は自我に反定立されている、それゆえ非我はその根源的形式からして純粋な不可能性である、すなわち決して自我のうちに定立可能ではない。ところがそれでもやはり、非我は自我のうちに定立されるべきなのである」(SW1-223)。定立と反定立の総合をつうじて、〈否定〉と否定とが関連づけられ、言いかえれば、〈否定〉はそれ自身連続性と手を結ぶに至る。根源的な〈否定〉の力が、どのようにして現象の世界を切り分け秩序づけるに至るのかを説明するこ

とが、ここでのシェリングの課題であったように思われる。

ここで問題にしたいのは、本書の区別する二つの否定、否定と〈否定〉のあいだの関係についてである。両者はともに「否定」という名で呼ばれるからには、その間には何らかの関係があるものと思われるが、その場合どのような関係を考えるべきであろうか。両者の関係は完全に同名異義的な関係にすぎないのであって、本来それらの間にはいかなる関係もないと言ってしまうてもよいのであろうか。連続性と手を結んだ否定は、根源的な〈否定〉から、なんらかの仕方で「否定的な力」を受け取るもの、否定の派生態として理解することはできないものであろうか。そうでないのだとすれば、〈否定〉が肯定的なものと切り離されあくまで〈否定〉であることに固執するかぎり、かえってそれは自己同一的なものへと反転してしまっているという、ヘーゲル的な論理にどのように対抗することができるであろうか。

〈否定〉の哲学と連続性の哲学との関連について

弁証法の原動力としての「否定性」はヘーゲル哲学の中心的概念の一つであるが、シェリングも否定の問題にこだわりつづけた。本書はコーエンがギリシア語の否定辞の区別によって「無限判断」の発祥を説明しようとしたことに批判的に言及しているが（22頁）、後期シェリングが「全面否定」と「限定否定」をそれぞれギリシア語の否定辞 οὐ と μή に対応させることで説明していることは興味深い。『哲学的経験論の叙述』において、シェリングは「メーオン (μή ὄν)」を、「ただ存在していないだけ」であり、それについては「たんに現実存在していることが否定されている」が、それでも存在する可能性はもつような非存在者として規定している。それに対して「ウークオン (οὐκ ὄν)」は、「完全に、そしていかなる意味においても存在しないものであり、すなわちそれについては、たんに存在の現実性のみならず、存在一般もまた、したがって可能性もまた否定されるようなもの」として規定される（SW10-283）。ここで「ウー (οὐ)」が絶対的否定を意味するのに対して、「メー (μή)」は限定的否定を意味する。つまり、メーオン (μή ὄν) という表現は現実的な存在については否定するが、

存在の可能性自体を否定するものではない。それに対して、ワークオン (οὐκ ὄν) という表現は、存在の可能性そのものの否定であるとシェリングは述べる。さらに『神話の哲学』において、本書でも「限定否定」であることが指摘されている (34頁) アリストテレスの「欠性 (στέρησις)」の理論と関連づけながら、シェリングはこのことを説明している。シェリングによれば、「音声 that 白くない (οὐ λευκὸν ἢ φωνή)」は、述語が主語に「適合せず」、主語の「いかなる可能的述語でもない」ような命題である。それに対して、たとえば「白くあることが本性上可能的であるが白くない」といった限定否定の場合に「非白 (μὴ λευκόν)」といわれる。この限定的否定、μὴ をもって表現される「欠性」の場合には、なんらかの「受容可能なもの (δεκτικόν)」が前提されることになる (SW11-306)。

以上のように、後期シェリングの議論においてもまた「全面否定」と「限定否定」という二つの否定の区別がはっきりと認められるが、この区別はシェリング後期哲学のうちできわめて重要な役割を果たしている。『自由論』におけるシェリングは、人間的自由という問題を考察する枠組みを、暗い「根拠」から「現実存在」の光への連続的高揚のうちに設定していた。この根拠を「メーオン (μὴ ὄν)」に相当するものとして理解することができるであろう。それに対して、「無からの創造」を議論するにあたってのシェリングの立場は変更されているように思われる。『自由論』のある注は、シェリングが「根拠」と「現実存在」の区別に基づいて「メーオン (μὴ ὄν)」および「無からの創造」を考えていたことを示唆する (FS45)。それに対して『哲学的経験論の叙述』においては、この「無からの創造」は「ワークオン (οὐκ ὄν)」からの創造として理解されなければならないとされる (SW10-285)。ここに至って、否定におけるこのような区別が、一方で根拠から生成したものとしての人間の自由を、他方でなにものにも拘束されることのない創造における神の意志の絶対的自由、存在の根源的な偶然性を考察するための枠組みを提供するものとなったと考えられる。つまり、シェリングの哲学的行程を見れば、絶対的否定と相対的否定という、この二つの否定が区別されながら、体系全体のうちでそれぞれに固有の役割を与えられているように思われる。

さて、カントに戻る。「無限判断」による「制限」と、肯定的制限とし

での「限定」とを著者は明確に区別している。「実在性の制限は規定ないし肯定でありうる。しかし、「たんに制限的にすぎ」ない無限判断の制限は、上述のとおり規定とはまったく縁がない。後者の否定的制限から前者の肯定的制限を区別するために、この肯定的制限の方はあえて以下では「限定」と呼ぶことにしたい」（137頁）。「無限判断」の「制限性」は、あらかじめ与えられたなんらかの実在性の領域の限定ではない。著者によれば、「段落が“空間”の漠たるイメージによって語るのは、Pの外にある非Pの際限なき広がりだが、けっして「規定」に先だって「あたえられ」、あるいはその「根底にある」ような実在ではありえないということ、ただそれだけである」（136頁）。評者自身、『純粹理性批判』を読む際に、「制限性」のカテゴリーと、実在性の「限定」とを重ねて理解しようとする自らの傾向に気づかされないわけにはいかなかった。このような無意識的な読みの傾向への反省を促し、本来なされるべき区別を意識させる点で、本書の叙述は大いに啓発的である。

本書の明らかにしたとおり、「無限判断」においてカントが連続性と決して結託することのない〈否定〉について、徹底的に考えたのは確かであると思われる。実際そのように読解することではじめてカントの根本思想を整合的に理解できること、そしてなによりそこに「区別の哲学者」たるカントの真骨頂があることを実証して見せたところに本書の大きな意義がある。その一方で、カント哲学のさまざまな局面において連続性にも大きな役割が与えられているように思われる。たとえば、「知覚の予料」においては「現象において感覚の対象をなす実在的なもの」が連続的な「内包量」をもつとされる。ほかでもないコーエンの解釈が、この「知覚の予料」に大きな役割を与えるところに特色をもつものであった²。「魂の永続性についてのメンデルスゾーンの証明」に対して、カントは魂が内包量を持つことは否定されえないとし、連続的な減退（remissio）の可能性を持ち出すことで批判を加えていた。

ここで問題にしたいことは、カントの内なる「連続性の哲学」と、〈否定〉

2 Cohen, Hermann: *Kants Theorie der Erfahrung*. Zweite neubearbeitete Auflage. Berlin 1885, S. 422ff.

の哲学の構想との関係についてである。たしかに連続性をもってカント哲学全体を理解する手引きとするならば、本来〈区別〉の哲学者であったはずのカントの真意が覆い隠されてしまうことは事実であろう。しかしその一方で連続性に大きな役割を読み込みたくなる誘因は、カントの記述そのものの内にもあることも否定しがたい。連続性を前提とする否定と〈否定〉のそれぞれに、カントは固有の役割を与えているのだろうか。「連続性の哲学」と〈否定〉の哲学は、カントの哲学構想においてどのような関連性のもとで構造化されているのであろうか。この点についても、評者は知りたいと思った。

引用文献略号一覧

- [FS] Schelling, Friedrich Wilhelm Joseph: *Über das Wesen der menschlichen Freiheit*. Hamburg 1997.
- [FW] Fichte, Johann Gottlieb: *Fichtes Werke*. Hrsg. v. Immanuel Hermann Fichte. 11 Bde. Berlin 1971. Nachdruck von *J.G. Fichtes sämtliche Werke*. 8 Bde. Berlin 1845/46. *J. G. Fichtes nachgelassene Werke*. 3 Bde. Bonn 1834/35
- [SW] Schelling, Friedrich Wilhelm Joseph: *Schellings sämtliche Werke*. Hrsg. und eingeleitet von Karl Friedrich August Schelling. 1856-61